

平成 31 年度入学試験問題（後期日程）

小 論 文

（中等教育教員養成課程）

注意事項

1. 解答は、すべて別紙解答紙の指定の箇所に横書きで記入すること
2. 解答紙には、かならず受験番号を記入すること

〔1〕 つぎの文章を読み、あとの問いに答えなさい。

誰のために勉強するのか

「いい学校」という知育中心の親の「よかれ」に先導される「良育」は、子どもに何をもたらしたのでしょうか。今日、日本の子どもの学力低下が騒がれています。最近、国際的な学力調査の結果が公にされる度に、日本の小・中学生の学力低下が指摘され、憂慮されています。このことは確かに問題でしょう。しかし、それ以上に注目すべきなのは、日本の子どもたちの勉強や学習に対する態度や認識です。すなわち、「勉強がおもしろい」「もっと勉強したい」「やればできる（自信がある）」といった、勉強への意欲が弱く、自信も低いのです（河地和子『自信力はどう育つか』朝日選書、二〇〇三年）。

勉強であれ仕事であれ、人はなにごとかを達成したいとか、より良い成果を上げたいといった動機づけ（達成動機づけ）をもっています。学校生活を送っている子どもにとっては、学力、勉学で良い成果を上げたいとの動機づけが大切です。そして、より高い成果を上げること、それができた自分に満足するのは自然なことです。これが、なぜ日本の子どもの場合には弱いのでしょうか。

達成動機づけと並んで、人の行動を方向づけるものに、他者と親しい関係をもちたいという親和動機づけがあります。この二つは概ね独立の動機です。ところが、日本では二つが正相関しており、密接に関係しているのです。これは日本人において自分と他者とは分かち難く結びついていること、すなわち、他者との調和的關係が自己の安定にとって重要であるということとも関係しています。

子どもの学習への動機づけでも、「勉強がおもしろい」「新しいことを知るのが楽しい」「できるようになる自分が好きだ」といった達成への動機づけよりも、「親を喜ばせたい」「(成績が下がると)お母さんが怒るから」「叱られないように」といった他者、とりわけ親への配慮や親との関係を良くしようとする気持ちなどが強いのです。日本の文化的特徴を背景に、親の子どもに対する関心や介入の強さが加わって、日本の子どもたちに強い他者志向的な学習動機づけが醸成されているのでしょう。

このような傾向は、高学歴化が始まった七〇年代にも報告されています。「お母さんが怒るから」「親が喜ぶから」といった、親の満足や失望を念頭に置いた動機づけです。

これは他国にはみられない、日本の子どもに顕著な特徴でした。この傾向は、現在、親の「少子良育戦略」の下、いっそう強まっているといえるでしょう。

これは見方を変えれば、日本の子どもたちは親の願いを素直に受け止め、親と子は目標を共有して勉強に励んでいる、ととらえることもできるかもしれません。親の子どもへの強い期待、それを受け止める子どもという、一見、良好な関係を築いているかのようにもみえます。そのときには問題にはならないかもしれません。

けれども、幼い子どもならいざ知らず、中・高生といえば自分の生き方や将来を考える時期です。その時期になっても親の意向を気にして勉強する子どもの未熟さや、そうする方向に子どもを追いやっている親の「よかれ」の問題性を考えずにはられません。このときはそれで成績が上がり、「いい学校」への入学に成功するかもしれません。しかし、「素直な子ども」の発達を長期的にみたとき、けっして楽観できません。

出典：柏木恵子『子どもが育つ条件 一 家族心理学から考える』2008年 岩波新書 pp. 92-94（設問の都合により本文の一部を改変している。）

（問1）日本の子どもたちについて、下線部分にある「勉強への意欲が弱く、自信も低い」と筆者が考えている理由とは何ですか。「動機づけ」という言葉を用いながら、75字以上100字以内で答えなさい。

（問2）子どもたちに、勉強への意欲を強く、自信を高くもたせるためにはどのようなことが必要だと考えますか。あなたの意見を300字以上、400字以内で述べなさい。